

## ルカによる福音書1章1－23節 「喜びの訪れ」

### 1A ルカの執筆動機 1－4

### 2A ヨハネ誕生告知 5－23

#### 1B 両親の悩み 5－7

#### 2B 御使いの現れ 8－23

#### 3B エリサベツの懐胎 24－25

## 本文

ルカによる福音書をこれから学びます。イエス・キリストの生涯を詳細に調べていくことができることは幸いです。この方こそが、私たちの信じている対象であり、この方を知ることは永遠のいのちに預かることです。

新約聖書に福音書は四巻あります。マタイ、マルコ、ルカ、そしてヨハネです。全てがイエス・キリストの福音を書き記していますが、それぞれ異なる視点から書いています。その微妙な福音書間の差異から、私たちはそれぞれの著者が何を言わんとしているのかを読み取ることができます。

皆さんは、その他の福音書を学んだことがあるでしょうか？私は、じっくり学んできたのは主にヨハネ伝とマタイ伝です。ヨハネ伝は、他の三つの福音書とは際だった違いがあります。彼が書き記した時代が紀元後九十年代であり、既に教会がイエス・キリストの生涯について共通の知識を持っており、直接イエスに触れたことのあるヨハネが、この方の本質について真正面から書いたものがヨハネによる福音書です。すなわち、この方は神の子であり、神から来た方であるということです。永遠のいのち、御霊のいのちを知りたい方は、ヨハネ伝を読まれるとよいでしょう。

マタイ伝はと言いますと、「旧約聖書の成就」と言って良いでしょう。旧約時代に、神がイスラエルに対して約束されたメシヤが、ナザレ人イエスにあって成就したことを強調しています。そして、イスラエルが待ち望んでいた神の国の王として来られたことを話しています。ユダヤ人向けの福音書と呼んでよいと思います。取税人マタイらしい、帳簿に記録を付けるかごとくのまとめられた記録です。

そしてマルコ伝についても触れなければいけません。マルコ伝は、実際はペテロから直接聞いたものであると言われています。そして、マルコ伝はイエスが行われた業が前面に出ています。その教えはマタイ伝で詳しく載っているのに対して、マルコはイエスが行われた業をハイライト、選び出して書いています。しばしば、主のしもべたるイエスの姿であると言われます。教えよりも、教えていることに果たして権威があるのかどうか、その業に注目しているローマ人向けに書かれている、とも言われています。

ではルカ伝は、どうなのか？実は、ルカ伝は私にとってとっつきにくいものでした。けれども、それは慣れていないだけで、今回、1章から最後の章まで一度に読み通し、概観しましたが、実に鮮やかなイエス像をルカは描き出しています。イエス様の人となりを書き記している、と言ってよいでしょう。一人の人間として生きられたイエスが、まるで小説で読むかのように、鮮やかに伝記として記していると言って良いでしょう。そして、彼の書くギリシヤ語はとても正確であると言われていいます。人の美を求めるギリシヤ人には適切な書物であると言われていいます。

一人の偉大な人を知りたい時に、私たちはいろいろな方法で知ります。イエス様は信仰の対象であり、主に用いられた僕と比べ物にならない方ですが、僕として用いられたチャック・スミス为例として取り上げたいと思います。私が初めに手にして本で、「収穫の時代”Harvest”」というものがあります。これは、カルバリーチャペルが始まった経緯と、その中で救われ、牧師になった者たちの証しが書かれています。カルバリーチャペルの中で主がどのように働かれたのか、その行いが強調されていると言ってよいでしょう。ちょうど、マルコによる福音書に似ています。そして、「カルバリーチャペルの特徴(Calvary Chapel Distinctives)」という本があります。それはカルバリーチャペルが何を信じているのか、その教えについて書いてある本です。これはマタイ伝がイエスの教えに重きを置いているのに似ているかもしれません。

そして、チャック・スミスが召天する前に出版された本があります。それは、チャック・スミス・Jr というチャック・スミスの息子が父に話を聞いて書き留めた本です。「恵みの回顧録(Memoir of Grace)」と言います。これは、教えでもなく、またカルバリーチャペルがどのような働きをしたかではなく、単純に、チャック・スミスの生涯を書いています。教えは聞いたし、その働きも見たけれども、彼の人となりはどういうものだったのか？ということ、彼が召天するまえに記録しておきたいと思ったのでしょ。これがまさに、ルカ伝に近い手法であります。

そこで、ルカ伝において、1章と2章について、イエスのご降誕とその先駆者ヨハネの誕生を、他の福音書にはない詳しさで、麗しく描かれています。そこに流れる神の恵みを感じ取ることができます。そして、3章から9章前半までがガリラヤにおける宣教です。マタイやマルコは、ガリラヤ宣教に多くの紙面を割いて、それからユダヤとエルサレムへの受難の道を詳しく書いています。ところがルカ伝には、9章後半から19章の前半という10章分を割いて、ガリラヤからユダヤ、エルサレムに旅をする、その短い旅の中で起こったこと、イエスが語られたことをたくさん描いています。例えば、有名な放蕩息子の話もその中に出てきます。そして19章の最後のところから24章までにエルサレムでの受難、そして復活を描いています。ガリラヤからユダヤまで行かれた時には、その間にあるサマリヤ地方がありますが、サマリヤ人の姿も数多く出てきます。このようにイエス様の人となりが美しく描かれており、そこに流れる恵みの麗しさを見ることができます。

ルカ伝においてのその他の特徴は、ある牧師がこういう言葉を使っていましたが、「バリアフリー」です。「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あ

なたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。(ガラテヤ 3:28)」とパウロが言いましたが、社会的、経済的、民族的な違いによる隔ての壁が、イエスにあって壊されている姿を見ます。例えば、主が女を用いられる姿をルカ伝では数多く見ます。バプテスマのヨハネの母エリサベツ、イエスの母マリヤ、イエスのところに来て涙で御足をぬぐった女など、女に対して神が目を留めておられます。また貧しい者についてのことが前面に出てきます。金持ちとラザロの話がその典型です。そして、先ほど話したようにサマリヤ人が多く出てきます。ユダヤ人が嫌った、かつて異邦人との混血によって出てきた人々であります。よきサマリヤ人が有名な話です。

そしてイエス様が、しばし夜を明かして祈られたことを多く記しています。また聖霊に満たされることもたくさんルカは書いています。人としてのイエス、ですからイエスに倣う者たちも同じように祈り、また聖霊に満たされる必要があることを教えます。

### 1A ルカの執筆動機 1-4

前置きになっているルカの執筆動機を読みたいと思います。

1:1 私たちの間ですでに確信されている出来事については、(V.2 挿入)多くの人が記事にまとめて書き上げようと、すでに試みておりますので、1:2 初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人々が、私たちに伝えたそのとおりを、1:3 私も、すべてのことを初めから綿密に調べておりますから、あなたのために、順序を立てて書いて差し上げるのがよいと思います。尊敬するテオピロ殿。1:4 それによって、すでに教えを受けられた事がらが正確な事実であることを、よくわかっていただきたいと存じます。

著者ルカについて、お話ししたいと思います。彼は、使徒パウロの同伴者でした。同じくルカが書いた使徒の働きにおいて、16 章で主語が途中で「私たち」に変わります(10 節)。それまでは「彼ら」だったのですが、そこから「私たち」に変わったので、ルカはパウロに会った時はすでに信仰者であり、パウロが実に殉教する時までいっしょにいた人でした。パウロが皇帝ネロによって死刑に処せられる直前、彼は「ルカだけは私とともにおります。(2テモテ 4:11)」と言っています。神の恵みの流れを話の中で伝えるルカは、確かにパウロの宣べ伝える恵みの福音を熟知していたことでしょう。そして、ルカは医者です。コロサイ人への手紙の最後の挨拶に、「愛する医者ルカ(4:14)」とあります。そこで、人が癒される時など、他の福音書には見られない医学的な表現も出てきます。

さらに、ルカは異邦人でした。そのコロサイ書の挨拶のところで、ユダヤ人信者の名が記され、その他の人々の名が記され、その中にルカがいるからです。しかしルカは、この福音書を見るかぎり、かなりユダヤ人とその宗教に精通しています。おそらくは、異邦人でユダヤ教への改宗者ではなかったのではないかと、思われます。使徒の働きに、パウロが会堂で説教した時に、改宗者が信仰に入ったという言葉が出てきますが、それは異邦人だけれどもユダヤ教に改宗した人々のことです。あるいは、テモテと同じように父が異邦人で母がユダヤ人だった、という可能性もあります。

ルカについて、パウロが詳しく書いている箇所があります。コリント第二 8 章 18 節から書かれています。「ひとりの兄弟」とはルカであろうとされています。読んでみます。「また私たちは、テスといっしょに、ひとりの兄弟を送ります。この人は、福音の働きによって、すべての教会で称賛されていますが、そればかりでなく、彼は、この恵みのわざに携わっている私たちに同伴するよう諸教会の任命を受けたのです。私たちがこの働きをしているのは、主ご自身の栄光のため、また、私たちの誠意を示すためにほかなりません。(2コリント 8:18-19)」

では本文を見てください。「私たちの間ですでに確信されている出来事について」と言っていますが、ルカがこの福音書を書いた時には、すでにマタイ伝やマルコ伝にあるイエス・キリストの生涯については知られていたと思われる。ルカは、二世代のキリスト者です。イエスの復活を目撃したのではなく、目撃した者たちの伝える言葉を聞いて、そして信じました。そして、「初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人々が、私たちに伝えたそのとおりを、私も、すべてのことを初めから綿密に調べております」とありますから、十二使徒から聞いたことはもちろんのこと、おそらくイエスの母マリヤからも直接、聞いたことは確かでしょう。マリヤがガブリエルから処女懐胎することの告知を受けているので、彼女から聞いたものと思われる。

そして、これを「順序を立てて書いて差し上げる」と言っています。その目的は、「すでに教えを受けられた事ながら正確な事実である」である、ということです。そして、5 節を読めば分かりますし、2 章 1 節もそうですが、歴史的出来事を記しています。また、ルカが記しているローマの役職の名称は、最近になって当初の遺跡や文書の中で見出されるものであり、彼が歴史について極めて正確に書いたことが分かって来ています。そして書いている相手は、「尊敬するテオピロ殿」です。「神を愛する者」という意味です。おそらくルカの仕えていたローマ高官ではなかったと言われています。彼が信仰を持ち、その信仰が確かなものとなるよう書いたものと思われる。

この時代、異邦人が教会の中に増えてきて、かつユダヤ教から迫害を受けてきた二世代のキリスト者が、改めて信仰の確かさを確認し、御霊によって情熱を取り戻す必要を感じていたのではないかと思います。ちなみに、執筆は紀元 61 年から 63 年の間でなかったかと言われています。私たちが伝道する時に、この確かさがとても必要です。初めて聖書に触れる日本人は、イエス・キリストの生涯そのものが架空のもの、伝説であり、実在のものではない、と考えます。このルカ 1 章 1-4 節から、イスラエル旅行である兄弟が朝のデボーションの箇所として話しました。なぜなら、これから数多くの、福音書に確証を与える遺跡を見に行くからです。

## **2A ヨハネ誕生告知 5-23**

これから2章に至るまで、バプテスマのヨハネとイエス様の誕生について書いてあります。バプテスマのヨハネがいて、彼がメシヤの来られたことを告げてそれでイエス様が現れるという流れは、福音書全てに書いてあることです。そこでバプテスマのヨハネの誕生の告知、それからイエスご自身のご降誕の告知、そしてヨハネの誕生、それからイエス様の誕生と交互に話が流れていきます。

## 1B 両親の悩み 5-7

1:5 ユダヤの王ヘロデの時に、アビヤの組の者でザカリヤという祭司がいた。彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといった。1:6 ふたりとも、神の御前に正しく、主のすべての戒めと定めを落度なく踏み行なっていた。

時は「ユダヤの王ヘロデの時」です。ヘロデ大王のことです。紀元前 37 年から 4 年まで、ユダヤを統治していました。彼自身はユダヤ人ではなく、イドマヤ人であり、エドムの末裔です。けれども、ローマ皇帝に重用されてユダヤ人の王として 37 年にエルサレムに来ました。

そしてそこに、「アビヤの組の者でザカリヤという祭司がいた」とあります。アビヤの組というのは、かつてダビデが礼拝奉仕をすべてのアロン家の子孫が行うように、二十四の組分けを行って、その一つがアビヤの組でありました(1歴代 24:10)。そしてザカリヤにも、神殿での奉仕が回ってきます。そして、妻もアロンの子孫です。「エリサベツ」という名ですが、ヘブル語では「エリシエバ」であり、実にアロン本人の奥さんと同じ名前です。

そして、6 節には「神の御前に正しく、主のすべての戒めと定めを落度なく踏み行なっていた」とあります。これは彼らが完璧であったということではありません。けれども、イスラエルの残された民として、腐敗していた宗教指導者も数多くいる中で、主の前に正しく生きた数少ない人々でした。同じように、イエスの両親ヨセフとマリヤも律法について正しく生きた人であったし、イエス様を十字架から墓に葬るために買って出たアリマタヤのヨセフも、同じように正しい人でした。

1:7 エリサベツは不妊の女だったので、彼らには子がなく、ふたりとももう年をとっていた。

ここが大切な点です。彼らは落ち度なく主の戒めを行っていたのに、不妊の女であり、子がなく、年を取っていたのです。子がいないということは、離縁してもザカリヤに何ら非を咎められないほど、ユダヤの民にとって恥とされていました。しかし、不妊であるとは彼女また夫に非があるからではなく、むしろ主の大いなる御業が現れるための、神の取り計らいでありました。

聖書の中に、不妊の女が用いられることが数多くあります。アブラハムの妻サラが不妊でした。イサクの妻リベカもなかなか子が与えられませんでした。ヤコブの妻ラケルもずっと子が与えられませんでした。サムエルの母ハンナは不妊のため、言葉にならない呻きをもって祈りを捧げました。ですから、神に用いられる人が生まれる時に、しばしば不妊によって誕生せしめることがあります。

## 2B 御使いの現れ 8-23

1:8 さて、ザカリヤは、自分の組が当番で、神の御前に祭司の務めをしていたが、1:9 祭司職の習慣によって、くじを引いたところ、主の神殿にはいって香をたくことになった。1:10 彼が香をたく間、大ぜいの民はみな、外で祈っていた。

先ほど組分けの話をしました。アビヤの組が当番になりました。そして、神の御前の務めとして、香をたくことになりました。これは、祭壇でいけにえを火で焼いた時の炭を火皿に入れて、聖所の中にある香壇で香をたくことです。そして、彼が香をたいている間、民がみな外に祈っていましたが、それは彼が主のご臨在に触れて、そして神の栄光にあずかった祭司が、民の前に現れて、祝福し、神の恵みを分かち合うために待っています。

1:11 ところが、主の使いが彼に現われて、香壇の右に立った。1:12 これを見たザカリヤは不安を覚え、恐怖に襲われたが、1:13 御使いは彼に言った。「こわがることはない。ザカリヤ。あなたの願いが聞かれたのです。あなたの妻エリサベツは男の子を産みます。名をヨハネとつけなさい。

この「主の使い」は、ガブリエルです。彼は天使長であり、旧約聖書ではダニエルに対して、メシヤが到来することを前もって告げた時に出てきた天使でした。したがって今、ガブリエルはそのメシヤの到来、また到来の前に現れるヨハネの誕生を前もって告知をしにやって来たのです。

そして「香壇の右」に立っています。なぜか？「あなたの願いが聞かれた」と言っています。香壇の煙は、主の前に立ち上る祈りを表していました。天において、二十四人の長老が香のいっぱいはいった金の鉢を持って、小羊イエスの前にひれ伏しています。そして、「この香は聖徒たちの祈りである。(黙示 5:8)」とあります。聖徒たちは、イエスが戻ってこられて神の国を立てられることを長いこと待っています。その祈りが主の前に聞かれていることを表しています。祈りは聞かれるのです。ザカリヤも彼の祈りが聞かれていたのです。

ザカリヤは天使を見て非常に恐怖に包まれましたが、旧約の時代も、天使に会った者たちが死にそうになっている場面が出てきます。ダニエルは、体の力が抜けてしまって倒れてしまいました。けれども、「怖がることはない」と励ましています。なぜならば、それは良き知らせだったからです。妻が子を宿すからです。その子の名は「ヨハネ」、「神は恵み深い」という意味です。

1:14 その子はあなたにとって喜びとなり楽しみとなり、多くの人もその誕生を喜びます。1:15 彼は主の御前にすぐれた者となるからです。彼は、ぶどう酒も強い酒も飲まず、まだ母の胎内にあるときから聖霊に満たされ、1:16 そしてイスラエルの多くの子らを、彼らの神である主に立ち返らせます。

ヨハネは、ゼカリヤにとって喜びとなり楽しみとなります。なぜなら、彼は人々を主に立ち返らせる器となるからです。神の救いが彼の宣教の働きによって訪れるからです。人々に神の救いが訪れることほど、喜ばしいことはないでしょう。いかがでしょうか、自分が祈っていた人がイエス様を受け入れる、救い主として受け入れるという決心をしたら、疲れも何もかも忘れて喜びに満たされます。

そして、彼は、「ぶどう酒も強い酒も飲まず」とあります。これは、民数記に書いてあるナジル人の誓いの一つです。生まれながらのナジル人という、サムソンを思い出さずとも、彼は、神への誓いを破ったので、最後に神の力が彼から去ってしまいました。けれども、ハンナの子サムエルは、そうではありませんでした。母がその子にかみそりを当てない、と誓いましたが、サムエルもナジル人として生きました。

1:17 彼こそ、エリヤの霊と力で主の前ぶれをし、父たちの心を子供たちに向けさせ、逆らう者を義人の心に立ち戻らせ、こうして、整えられた民を主のために用意するのです。」

ヨハネは、これまでの預言者以上に偉大な者であります。なぜなら、主が来られることを用意する器だからです。「エリヤの霊と力」とここにあります。旧約聖書はマラキ書が最後です。そしてマラキ書の最後に、主の日の前にエリヤが来ると預言されています。「見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。(マラキ 4:5-6)」ヨハネ自身はエリヤではありません。けれども、エリヤの霊と力、つまりエリヤに神が働かれたその御霊と力をもってヨハネも、人々を主に立ち返らせる、ということです。

1:18 そこで、ザカリヤは御使いに言った。「私は何によってそれを知ることができましょうか。私ももう年寄りですし、妻も年をとっております。」1:19 御使いは答えて言った。「私は神の御前に立つガブリエルです。あなたに話をし、この喜びのおとずれを伝えるように遣わされているのです。1:20 ですから、見なさい。これらのことが起こる日までは、あなたは、おしになって、ものが言えなくなります。私のことばを信じなかったからです。私のことばは、その時が来れば実現します。」

ザカリヤの不信仰に対する、神からの厳しい訓練です。彼は、言葉が語れなくされました。祭司が祝福を民の前で宣言する、その言葉が彼の口から奪われてしまいました。このことを通して、ザカリヤが主のことばは信じなければいけないということを痛い方法で学びます。

ガブリエルは、「神の前に立つガブリエル」とその権威を強調しています。彼の語ることは神のことばそのものでした。この喜ばしい知らせを疑ったので、この言葉が実現する時まで彼は物が言えなくなります。ここはとても大切な教訓です。なぜならば、不信仰、疑いに関わらず、その言葉は必ず実現します。神は、人が信じて、信じなくても、ご自分のことばを実現されます。でも、信じないことにより、私たちは大きな犠牲を払わなければなりません。たとえ喜ばしい知らせが実現しても、そのことを楽しむことができないという犠牲です。

1:21 人々はザカリヤを待っていたが、神殿であまり暇取るので不思議に思った。1:22 やがて彼は出て来たが、人々に話をすることができなかった。それで、彼は神殿で幻を見たのだとわかった。ザカリヤは、彼らに合図を続けるだけで、おしのままであった。1:23 やがて、務めの期間が終わ

ったので、彼は自分の家に帰った。

人々が、ザカリヤが出てきた時に、幻を見たのだと分かったとあります。神殿の中で、主ご自身に会う、御使いに会う、御霊に満たされるという霊的体験をすることは当たり前のように考えていたようです。私たちの中でも、単なる知的な聖書の学びではなく、信者たちが集まる中で御霊が働き、神の取り扱いを受けることを願います。

### 3B エリサベツの懐胎 24-25

ザカリヤは家に帰りましたが、主のことばはその通りになりました。

1:24 その後、妻エリサベツはみごもり、五か月の間引きこもって、こう言った。1:25 「主は、人中で私の恥を取り除こうと心にかけて、今、私をこのようにしてくださいました。」

五か月の間、引きこもりましたが、六か月後に、マリヤが彼女に家にやって来ます。エリサベツは妊娠して、「主は恥を取り除いてくださった」と言っています。先ほど話したように、ユダヤ人の女にとって、子を産まないことは恥でありました。

こうして、祈りが聞かれて、主のことばも実現しています。私たちがその喜びにあずかっているでしょうか？それとも、疑うことによって喜びを見失っているでしょうか？イエス様は言われました。「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。(ヨハネ 15:11)」御言葉がそのとおりになり、また祈りを神が聞かれることによって私たちに喜びをもたらしたいと願われています。信じて祈ってみましょう。